「特集・業からみた造園研究の課題」

造園コンサルタント業からみた造園研究の課題

山 本 紀 久*

A Problem of the Researches in Landscape Architecture from the View of
the Landscape Consultants

Norihisa YAMAMOTO

1. 緑（自然）の価値の変化

土、水、空気、生物など、地球の恵みを犠牲にしすぎた経済社会のありようを問いなおし、自然と共生する人類社会づくりの出発点をめざす「地球サミット」（環境と開発に関する国連会議）が今年（1992年）の6月3日から12日間にわたる会議の幕を開けた。「人類共有の持続可能な発展」の理念を掲げ、地球の資源や環境を“食いつぶす”ことなく将来の世代を含めて公平に分ちあおうとする考え方で、相互に依存しあっている「環境政策と開発政策の統合」をめざしている。ランドスケープの関係者に対しては、これまで以上に広範、多岐にわたる「自然と人とのよりよいかかわり」の総合像の具体化が期待されており、それに伴う造園研究の具体的な対応が求められている。

2. 求められる造園研究の方向

造園に求められる役割が従来の「与えられた場を修景する」という範囲にとどまらず、21世紀に向けて世界が模索している「バランスのとれた環境と開発のあり方」に対する基本的な考え方を打ち出し、それに必要な政策やシステム及びそれに伴う技術開発の方向を示すなど積極的に新しい分野への先導的役割が期待されているのである。

造園の技術は、もともと今日の命題となっている「環境と開発を両立させる」考え方がその基本にあった。しかしこれまでは環境の悪化がさほど深刻ではなかったこともあり、「開発指向からの物づくり」という性格の仕事が大半であったといえる。地球の自然にもさほど気をつかわずに自由に物づくりができる状況が続いてきたのである。しかし今、地球は目にみえるほど病みはじめています。今こそ造園の考え方の基本にたち戻って「環境と開発を両立させる」具体的方法を示していく時だと思う。

3. 造園コンサルタントからみた研究の課題

環境保全と開発とは矛盾する行為である。造園コンサルタントは、この両者のバランスを保つために環境保全と開発にかかわる人々に対して、その場その場の状況に応じて矛盾点を整理し、その方向性を示し、具体像としてまとめる立場にある。

環境保全と開発の矛盾点をみつけ出すには、自然生態学、特に植物生態学を基盤に置いて考えるのが理にかなう。矛盾を解決する方法も、自然の植生に対する人の働きかけによる改変の程度として、とらえておくことがよいと考える。

人の働きかけによる自然の改変の程度を＜自然の代償度＞としてとらえれば地球の自然をバランスよく維持する技術は①自然環境を手をつけずに保全する②自然に近い状態で（回復）保全する③自然らしく創出する④人工地として環境をコントロールする。という目標に対する自然代償技術としてとらえるのが自然だと思う。

昨今、造園コンサルタントに依頼される仕事の内容は多岐にわたる様になってきたが、特に我社に限っていえば、従来の人工地（市街地）としての環境をコントロールするものの他に自然らしさの創出や自然の（回復）保全という傾向のものが多くなって来ている。また、そこでいう自然な生物を含めた自然を対象とするケースが多いのが特徴である。また、社会的には自然らしさの創出や自然の（回復）保全に対する価値観の合意を行うための理念の構築やそれを証明する科学的根拠の蓄積が十分でないこともあって、その部分に対する調査計画、研究、調整の業務を依頼されることもしばしばである。

そのような業務の中での造園コンサルタントの役割は調査計画、研究においては仕事の性格上、実務経験者やエキスパート及び学識経験者のノウハウを環境と開発の政策にバランス良く整合させることであり、調整業務で

*憐愛植物設計事務所

は委員会やシンポジウム等を通して整合させた内容を市民に説明、理解してもらうことにある。

ところが、現実の業務遂行に際していくつかの課題がある。その中で特に大切と思う点は、「生きもの（動植物）を扱う業種という視点に立った研究、実務のシステムを再確認しておくこと」だと思う。ここではそれを今後の研究の課題として提案しておきたい。

(1) 研究を現場に生かすシステム

医学は生きものである人間を扱う。そこで一番重視されるのは臨床経験ときく。人は皆個人差があり、病状の現れ方や程度は全く異なる。医師の役割は患者の様子をみて病気の内容をしぼり込み、病状にあわせて処置を行うが、その際の迅速、的確に判断できる能力は長い間の臨床経験の蓄積によって養われるという。医学会の発表の多くは臨床例による実証である。生きもののしくみが理論だけでは説明のつかないほど複雑多様であるかの証しであろう。

造園の関係者も、生きものを扱う点では医師と全く同じといってよい。昨今、樹医制度ができたのも当然のなりゆきだと思う。そうしてみると、造園学会での研究発表の内容には、医学での臨床に当たるフィールドに臨んでの調査、研究が少ないように思える。理由を推察するに・フィールドの状況が複雑、多様すぎる・調査の結果が短期間に明瞭に表れにくいこと、があげられると思う。しかし机上や実験室での成果はすぐに実務に生かすにくいものが多い。その解決の方法の一つとして、「現場そのものを研究の対象として設定するシステムを用意する」ことを提案したい。実際これまでも日本の著名な造園家は医師と同様、多くの現場を研究の場として名園を残してきた。全ての現場が実験の場であるといい切る人もいる。しかし今は昔と違って造園の内容も多岐にわたるので、どうしても専門の研究者が必要なことも事実である。とすれば研究者とフィールドを扱う実務者が一体となって相互に協力しあえる体制づくりを造園界全体で考えていくことが必要だと思う。

(2) 生きものを主役とした実務のシステム

植物を扱うに当たって、「民間ではできるが、公共事業では難しい」ということをよく聞く。公共でできないものの代表は

- ① 植栽設計の監理
- ② 植物材料検査
- ③ 植物の事前確保
- ④ 植栽時期の設定
- ⑤ 植物の継続的な管理

の5点だと思う。

ところが、目標とする植物景観づくりは以上の5点が満足に遂行されないと達成できない。

① 植栽設計の監理

設計監理は設計の意図を現場に正確に表すために、現場の実状に合わせて効果的に調整する業務である。扱う素材の規格がはっきりしている建築でさえ、現場での設計変更は日常のことであり、設計者が監理を受け持つことが常識となっている。植物を扱う造園では建築とは比べ物にならないほど、素材の規格はまちまちである。また、土壌の状況や施工の時期の変更など事前に予想し難いことも多い。数々の名園を生んできた日本の庭づくりの例をあげるまでもなく、造園の監理は必要というよりも不可欠なものといってよい。にもかかわらず公共事業では設計者が監理を行うことはきわめて特別なケースに限られる。建築も造園も一体的なものにとらえる欧米のコンサルタントにとっても全く理解できないことだという。

② 植物材料検査

品質や寸法の規格に一つとして同じものがない、「生きている素材」を、設計内容に合致するかどうか個別に確認する行為である。設計の意図にそぐわない場合は必要に応じて規格や種類を変更することもある。これも監理業務の一環として行われるもので必要不可欠なものである。

③ 植物の事前確保

植栽の対象となる種類は植物の数だけあり、規格も含めれば無限である。広範囲から選べるほど設計の自由度は増すが、植物が育つのに時間はかかるので市場の植栽材料の種類や規格はごく限られてくる。一定の時間をかければ準備できることは公共事業である花博の例等でも実証されている。しかしこれは公共事業では特殊例であり、まだ一般には普及していない。目標とする規格の植栽材料をつくるのには時間が必要であることが認識され、植栽材料の事前の準備が特別なことでなくなれば、その分だけ緑の質も経済性も向上することは明らかなのだが。

④ 植栽時期の設定

東京ディズニーランドでは、マツ類、落葉広葉樹、常緑広葉樹、ヤシ、タケ類に対する植栽適期の幅を設定し、それにあわせて土木、建築のスケジュールを調整した。土木、建築のスケジュールは季節に大きく左右されないが、植物は生理的に植栽の適期が決まってしまう。また樹勢の回復には一定の時間も必要である。そのために植栽のスケジュールをもとに、土木、建築をそれに合わせることが基本との判断による。

わずかな植栽時期のずれが植物の生育にとって致命的であることは造園の関係者であればだれもが承知していることである。にもかかわらず、そのことがあまり重視されないのは、人間の技術に対する過信なのか体制に対するあきらめなのか判断し難い。いずれにせよ植栽時期を念頭に置けない造園設計には限界がある。

⑤ 植物の継続的な管理

「管理は芸術である」とはアメリカの著名な造園会社の女性管理マネージャーの弁である。「半づくり半育て」は自然と人との協働で庭をつくるという日本の庭師の精神である。このように洋の東西を問わず、生きている植物を素材とする造園の世界では目標とする景観に限りなく近づけるための管理の重要性が認識され、施工後も設計者が何らかのかかわりを持ち、設計の考え方が継続的に反映されることが当たり前のこととして理解されている。しかし公共事業のシステムでは設計、施工、管理は個別に進められ、一体のものとしてコントロールされることがきわめて少ないと感ずる。その結果は、彼女のいう「芸術の域」に高めることは難しくなる。

おわりに

造園の施工会社を経て造園コンサルタント業にかかわっ

てからほぼ30年しか経過していないが、その間に造園界も大きな変貌をとげた。社会の要請にこたえて、土木や建築も含めた大公園も楽々とこなす総合力も蓄えてきた。しかし、我々は今、世界で求められている「自然との共生」という命題に対していまだに植栽した植物が人間とのかかわりの中でどのように反応し、盛衰していくのかごく一部しか理解していない。ましてや小鳥や昆虫や魚がどんな環境を好むのか、またそんな環境を人間がつくれるのか、などについてはほとんど満足な答えを用意出来ない状況にあると思う。しかし他の業種に較べれば造園関係者が最もその答えを具体的に解き得る位置にいると思う。それを達成するためには官・民・学が一体となって「生きものを扱う造園の特質」を認識して21世紀の世界が求めている「環境と開発の無理のない統合」の答えを具体的に実践していけるシステムづくりを模索するときではないかと思う。